

研究主題 「人としての生き方についての考えを深め、 よりよく生きる生徒を育てる道徳教育の創造」

～ 学習指導要領が求める道徳教育の実践を通して ～

幸手市立幸手中学校

1 研究主題の設定理由

本校では、学校の教育目標として、「学び続ける生徒（知力）」、「心豊かな生徒（徳力）」、「活力ある生徒（体力）」を育成することを掲げている。特に、生徒に身に付けさせたい力として、問題解決能力、協調性、ICT活用能力、学習内容の理解と活用力を重視している。研究の最終目標は、生徒が自ら課題を見つけ、目標に向かって努力する学校づくりを進めることにある。そのために、生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培い、道徳性を養う教育実践、対話を通して道徳性を深める授業、人権教育などの生き方教育を推進している。

令和元年度から「プランニングシート・振り返りシートの活用」などを全クラス共通で行い、道徳教育の研修を続けてきた。生徒の内的資質を育成し、「考え、議論する道徳」への授業の質的転換を目指している。これまでの成果は、令和3年度の「関東甲信越中学校道徳教育研究大会」などで発表してきた。しかし、アフターコロナの社会の動向と本校のこれまでの課題を踏まえ、小中連携の視点から9年間での児童生徒の学びを見通すことで、さらなる道徳教育の充実と自学自習できる生徒を育てていく必要がある。そこで、自己を見つめ、よりよく生きることのできる生徒の育成を主軸に、道徳教育の要となる道徳科の授業改善をさらに進めるために、令和5年度からはリーディングDX事業指定校として、PBLや生成AIの授業活用を取り入れながら、自ら学ぶ主体的な学びを進めている。

2 研究の仮説

- (1)教育活動全体の中で、教師が道徳的価値の理解と明確な意図をもつ指導を行うことで、生徒は自らの生き方を多面的・多角的に考えることができるであろう。
- (2)道徳科授業において、道徳的価値の理解や振り返りを実践することで、生徒は自らの生き方についての思いや願いをさらに深めることができるであろう。
- (3)授業の展開では、ねらいにせまる的確な発問とその連続性を構築し、意見交換の場を確保することで、生徒の「主体的・対話的な深い学び」や「他者を思いやる態度」、「感謝の心」が身に付くであろう。



(1)～(3)を意識して道徳教育を行っていくことで、

- 自己肯定感の高い生徒
- 思いやりがあり、他者と対話し協働できる生徒
- 進んであいさつができる生徒

が育成されるであろう

3 研究の経過 (令和7年度 主要部抜粋)

月	日	研究内容
4月	3日	第1回校内研修推進委員会
	4日	校内研修(本年度取組の確認)
	11日	第1回道徳教育モデル校発表会連絡会(さくら小)
	14日	校内研修(道徳オリエンテーションについて)
	同	職員向け道徳通信の発行「道徳オリエンテーション」
	21日	リーディングDX R7度kickoff会議(東京 砂防会館)
5月	12日	校内研修会(学びのDX,教科ごとの指標について)
	23日	埼玉県道徳教育推進連絡協議会参加(さいたま市 県知事公館)
6月	9日	生成AI職員研修 幸手市教育委員会 大西久雄先生
	17日	道徳科研究授業 1年4組、あじさい
	18日	デジタルシチズンシップ講座1
	同	生成AIパイロット校第1回座談会
	26日	デジタルシチズンシップ講座2
7月	2日	道徳科研究授業 1年3組
	9日	メディアリテラシー講座 3年
	11日	校内研修(道徳)(全体会・分科会) (幸手市教育委員会 山本直人先生 藤原祐介先生)
	24日	第3回道徳モデル校発表会連絡会(幸手市役所)
	29~	(~31)リーディングDX夏季研修会参加
	31日	道徳科指導案検討会(幸手市立西中学校長 島方勝弘先生)
8月	1日	道徳科指導案検討会(幸手市教育委員会 山本直人先生)
	6日	埼玉県道徳教育研究会夏季研修会(鴻巣市文化センター)参加
9月	16日	幸手市教委・県東部教育事務所支援担当学校訪問(全学年道徳授業)
10月	9,28日	リーディングDXスクール視察 久喜市立鷲宮東中学校(9),鷲宮西中学校(28)
11月	11日	令和6・7年度埼玉県道徳教育研究推進モデル校 幸手市教育委員会・幸手市教育研究会委嘱研究発表会 (於 幸手市立さくら小)
		
		
		
		
11月	18~19	生成AIパイロット校視察(沖縄県嘉手納中学校)
12月	8日	校内研修(発表会総括と研修の総括に向けて)
	10日	生成AIパイロット校視察(静岡県吉田中学校)
1月	29日	リーディングDX(生成AI活用授業)授業公開

4 研究の内容

(1) 各教科等の特質に応じた道徳教育の実践

道徳科の目的は、生徒が社会生活において守るべき行為の基準(道徳観)を養い、それぞれの道徳性を育むことにある。そのために道徳的諸価値の理解を基に人間としての生き方を考え、生徒が人や社会の見方を広げたり深めたりすることが重要である。本校では、年間指導計画に従い教科書を効果的に活用するとともに、必要に応じて重点指導項目として文部科学省作成教材や「彩の国の道徳」「幸手市郷土資料集 道徳のまち さって」を位置付け、計画的に扱っている。また、教材吟味を重視し、すべての教育活動について、道徳教育の「内容項目」を意識することで、各教科、領域の特質に応じた道徳教育の在り方について教職員の共通理解を深めながら実践を進めている。

(2) 道徳科の授業を効果的に行うための環境づくり

本校では、全学級内に道徳コーナーを設置し、授業での学びや振り返りの足跡を継続的に提示している。廊下掲示の「今月の詩」や「名言」などと関連付けることで生徒が日常生活の中で道徳的諸価値に触れ、考えることができる環境作りを進めている。また、年度当初には「道徳オリエンテーション」を実施し、道徳科の学習の意義や進め方について確認するとともに、自分自身の心と向き合う学習への準備を行っている。授業における約束や話合いの在り方について共通理解を図ることで、その後の道徳実践の土台づくりとしている。さらに、道徳部会を中心として、各学期に、生徒、保護者向けの「道徳通信」を発行し、学習内容やねらいを共有し、保護者と共に考える機会を設けている。なお、教職員向け「道徳通信」も発行し、研修資料としている。

(3) 授業プランニングシートを活用した連続性のある効果的な道徳科授業実践

教材研究については、教材のもつ「よさ」を見いだし、教材文と道徳科の内容項目とを関連付けながら、その価値を最大限に引き出すことを重視している。教材の題名に込められたメッセージを想像し、道徳的諸価値を意識して読み込むとともに、生徒の心に残る場面を大切にしたい授業づくりを各教員が行っている。また、効果的な授業展開を図るため、発問を精査し、その連続性によって生徒が思考を深められるよう工夫している。その一助として、本年度は小中連携の視点から共通の「プランニングシート」を改良し、指導のねらい、発問、振り返りを一体的に捉えた授業実践を行った。

(4) 1時間ごとの効果的な振り返りと記述カードの活用

道徳科の授業では、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、多面的・多角的に考えながら、人間としての生き方についての考えを深めることがもともとめられている。その学習を確かなものにするためには、授業の終末における振り返りの在り方が重要である。本校では、道徳科での学習を通して得た気づきや考えを言語化するため、共通の振り返りカードを活用してきた。加えて必要に応じて、ICTを活用して自分の意見や考えを共有し、学習の蓄積を可視化することで、生徒自身が自らの成長の過程を振り返ることができるようにしている。



(5) 意見交換の活発化、PBL活動及び生成AIの活用

道徳科の授業において、意見交換を活発に行うことは、本校が重点的に取り組んできた研究事項である。令和5年度以降は、リーディングDXスクール事業指定校として、特にGIGA端末及びクラウド環境を活用し、生徒の情報活用能力の育成と併せて、協働的な学びの充実を図ってきた。授業では、意見交換ツール等を活用し、生徒一人一人が自分の考えをアウトプットした上で、他者の意見と比較・検討する学習も行っている。また、班活動においては、意見を整理・共有する過程で生成AIを活用し、生徒の思考を補完したり、伴走支援したりする立場として位置付けることで、多様な視点から考えを深める工夫を行った。

(6)非認知能力、特に自己肯定感を高める教材の研究と授業実践

非認知能力は、生徒が将来にわたって主体的に生きていくために重要な資質・能力であり、意欲や協調性、粘り強さなど、数値化しにくい側面を含んでいる。本校では、特に自己肯定感に着目し、道徳科の授業を通してその育成を図っている。そのため、教材吟味の段階から生徒のよさに光を当てられる視点を大切にし、生徒が自分自身や他者の価値に気付くことができるよう教材の活用を行っている。また、話し合い活動を通して互いの考えを認め合い、高め合う経験を重ねることで、生徒が自らの存在や行動に自信をもてるような授業実践を進めている。



5 研究の成果と課題

令和7年度の「研究仮説の検証のための道徳アンケート」(本校独自…令和元年度より継続調査)では、道徳科の授業に対する生徒の肯定的な回答が顕著に増加した。また、埼玉県学力・学習状況調査においても、令和5年度からの2年間で「自己効力感」を含む非認知能力の各項目の数値が向上している。さらに、「主体的・対話的で深い学びの実践」の令和7年度調査結果は、全学年において県平均を0.1ポイント上回る結果となった。(右上表参照)

令和7年度 埼玉県学力・学習状況調査
「主体的・対話的で深い学びの実践」

		令和5年度	令和6年度	令和7年度
現1年生	本校			4.2
	県			4.1
現2年生	本校		3.9	4.0
	県		3.9	3.9
現3年生	本校	3.8	4.0	4.1
	県	3.8	4.0	4.0

※学年は令和7年度の学年を示す。

「規律ある態度」の各調査結果数値についても概ね向上している。学級経営と「非認知能力」「学習方略」あるいは「主体的・対話的で深い学び」の取得は関連すると言われるが、日々の生活の中でこうした力の取得が数値として検証され、取組が間違っていないことが判明したことは成果の一つ目である。

成果の二つ目として、授業において「教師自身が道徳的価値を理解し、明確な意図をもって指導に当たること」を重点として一貫した取組を進めてきた点が挙げられる。

「プランニングシート」を基に、教師一人一人が教材に対する納得解をもって授業を構想し、「振り返りカード」を評価に生かすという、いわゆる「幸手中スタイル」が校内で共通化された。その上で、特に重視してきた「自己との対話」や「他者との意見交換」の場面においては、必要に応じてICTや生成AIといった新たな技術を活用することで、生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。これらの手立ての有効性が確認できたことは、大きな成果である。



一方で、学力向上や、挨拶等に代表される一部の規律に関する達成状況には、なお課題が残っている。今後は、生徒が自らを見つめ、希望や目標をもって学習に向かう姿勢を一層育成し、自学自習の習慣化を進めたい。そのためにも、これまでの成果を踏まえつつ課題克服の方策を再検討し、道徳教育のさらなる充実を図っていきたい。